

---

# リバース！

小沢新都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リバース！

### 【Zコード】

Z9676Q

### 【作者名】

小沢出新都

### 【あらすじ】

獲物を食らうものも、いつかは獲物として食われ。敵を殺すものも、いつかは敵に殺される。

それは悲しい生き物の性。さが

この物語は憎しみの物語でもある。復讐の物語でもある。恐怖の物語でもある。そして愛の物語でもある。

あなたはこの物語に何を見出すのか。

部屋の中に悲痛な悲鳴がひびく。

「うわあああん。いやだああ。やめてよおおお。」

泣いているのは、夜明け前の空を『』したような碧い髪と、海に落ちた木の葉のように透き通った緑の瞳をもつ『9歳』の男の子だった。その姿は女の子と見紛うほど可愛い。

「うふふ。ケイさまは凄く可愛いですねえ。」

うしろからそんな男の子を抱きすくめのは、金色の髪に琥珀の瞳をもつティーンエイジの少女。その顔は興奮で真っ赤に染まり、整った顔が残念に見えるぐらいの満面の笑顔を浮かべている。

「はあはあ、ケイさま可愛いよ。まるで天使だよ。」

紅潮した頬のまま危ない言葉をつぶやく少女。

「もう、舐めちゃいたいくらい。いや、舐める。」

ペロペロペロ

少女は極めて危険な顔のまま少年の顔に舌をはわし、危ない薬を舐めたみたいにトリップした顔を見せる。あらゆる意味で末期だ。少年の方はあまりの恐怖に、ガクガク震え悲鳴すらあげられないでいる。

そんな少年を助けるものはおりず、少女はひたすら荒い息をつきか弱い少年の瞼や顎や頬に舌を這わす。

「ああー、ケイさまなんでそんなに可愛いんだーー最高だよーー。」

これはそんないろんな意味で可哀想な場面からはじまる物語。

「もうやだー。」

ラヴェルニカは机の前でぐでーっとその身を投げ出した。

「お行儀わるいですよ、ラヴェルニカさま。」

その姿を見て侍女のマイカがすぐに注意する。それにラヴェルニカは口を尖らせて答える。

「だつてー、またお見合いしろつていうのよ。」

「当り前です。公爵家の令嬢が、二十歳を越えても結婚どころか浮いた話ひとつないなんて緊急事態です。」

恋愛話にはとんと縁がないラヴェルニカだが、別に不細工なわけではない。金色の髪に、くりくりの琥珀色の瞳、雪のようないい肌。可愛くてお人形さんみたいと呼ばれる容姿は、貴族の間でも評判が高い。なのに何故この歳まで相手がないのか。

「だつて素敵な人がいないんだもん。」

「素敵な人つて素晴らしい人ばかりだつたじゃないですか。王族の血を引く富廷一番の楽師に、若くして騎士団を束ねるカリスマ騎士団長、将来の宰相候補の殿下の側近。どなたも容姿、性格、家柄どれをとっても申し分のない方でした。」

「えー、あんなのやだ。」

「何故ですか?」

「だつてでつかくてじつくて全然可愛くないんだもん。ていうか怖い。」

「では、どんな方がよろしいのですか?」

「ちっちゃくて可愛い10歳以下の美少年。」

「犯罪です……。犯罪者がいます……。」

真顔で言い放つラヴェルニカに、顔を暗くして額を押さえる侍女。そこにバンツと扉が開かれ、涙で濡らした目をハンカチで拭う妙齢の女性が現れる。

「いいのよ。その子をショタコンに育ててしまつたのは私の罪。全部わたくしが悪いの。」

誰であろう。ラヴェルニカの母、マルニカである。

「ショタコンつてまるで変態みたいに呼ばないで！私は神聖なる美少年愛好家よ！」

胸をたたいてきつぱりと変態宣言するラヴェルニカ、この歳になつて嫁の貰い手がないわけである。

マルニカはそんなラヴェルニカの姿に溜息を吐くと、机の上に白封筒を置いた。

「何よ。また縁談？絶対いかないからね。」

「ええ、あなたが『ルベルント王国三大優良物件』とのお見合いを全力ですっぽかしたことから、普通の縁談はあきらめたわ。今日は最終手段を持つてきたの。」

「最終手段？」

ラヴェルニカは胡散臭げな表情で母親を見る。

「ええ、ケイナードさまを覚えてる？」

「ケイさま！？」

その名前を聞いた瞬間、ラヴェルニカの目が爛々と輝きだす。

「ケイナードさまと言えば隣国のロマーニ帝国の王子さまですね。公爵さまの妹君があちらに王妃として嫁いで生まれたといつ。」

「ええ、そうよ。私の義妹でもあるラヴェンダさまは美しく素敵の方でいらっしゃったわ。ロマーニ帝国に留学してたころ陛下に見初められて王妃になつたのよ。」

「ケイさま…。それは私が今まで出会つた中で最高の至高の完璧なる美少年よ。」

世間話をする一人とは、何か別の話をしているラヴェルニカ。

「5年前にロマーニ帝国で初めて会つたの。もう天使みたいに可愛くて、一緒にいられた時間は人生の中でも最良の時だつたわ。でも…、次にロマーニに行つたときには会つてくれなかつたの。いつたい何故…。」

「心当たりとかないんですか？何か失礼をしたとか。」

「全然ないわ。一人つきりでとっても可愛がつてあげたの。ずっと抱きしめて、頬ずりしたり、撫でまわしたり。ちょっと舐めたりし

たの。女の子の服着せてあげて、それがもう本当に似合つたの…」「絶対それが原因ですね。」

マイカはラヴェルニカのセリフに納得して頷く。

「それでそのケイさまがどうしたの？」

訪ねるラヴェルニカに、マルニカは微笑んだ。

「あなたをケイナードさまの妃として迎えたいといつ話が来てるの。」

## chapter 3 : tiger and horse トライア

「ふざけるな！」

ケイナードは田の前にいる側近のルベラックを怒鳴りつけた。

「俺に言われても困るぜ。陛下の命令なんだし。だいたい決まった相手もいないんだろ？別にいいじゃないか。」

一応部下のはずのルベラックだが、中が良いせいがケイナードに對してはかなりざつくんばらんな態度をとる。

「いいわけあるか！確かに王族に生まれて望んだ相手と結婚しようと思つていない。だが、あいつだけはあいつだけは…。」

ケイナードは何かを思い出したように、顔を蒼白にして頭を抱え座り込む。

「子供の時の話だろ。いい加減に立ち直れよ。」

「お前はあれに会つたことないから分からんのだ。あいつが俺に何をしたと思う。部屋に連れ込んで、女モノの服を着せられ、ずっと連れられないように拘束され、あまつさえ俺を舐めだしたのだぞ！あの狂氣の笑み。奴は…奴は間違いなく悪魔の娘だ。」

ガクガク震える一国の王子の姿にルベラックは苦笑する。

「まあ会つたことはないが、遠田でなら見たぞ。あれはお前…。」

そこでルベラックは何かを楽しむような笑みを浮かべる。

「まあとりあえず会つてみる。5年前の話だし、会つてみれば印象が変わるって。どうか今からここに来るしな。」

「なんだと！」

ルベラックのセリフにケイナードが驚きの声を上げたのと同時に。

「ケイさまああああああああああああ。」

大きな女の声が城の中に響く。

忘れようもないあの女の声。

それと同時に駆け足の足音がこの部屋に近づいてきている。ケイナードは顔を一層青白くすると、あたりをキョロキョロと見回しあじめた。

「どこか、隠れるところはないか！逃げ道は…」

「諦める。俺が逃がせん。それに…。」

ルベラックが言葉をつづけようとしたとき、バタンッと執務室のドアが開かれた。

「ケイさまああああ。お嫁に参りましたあああああ。」

chapter 4 : where are you 貴方は何処？

ケイナードとの縁談の話を聞いたラヴェルニカは、すさまじい勢いで承諾し、そのまま準備されていた馬車にのり、ロマリー帝国にたどりついた。

あまりの準備の良さ陰謀めいたものをマイカは感じたが、「ケイナードさまにまた会える！それどころかケイさまと結婚！？」とテンションが上がったラヴェルニカのほうは気付かなかつた。

ロマリー帝国の王宮についたラヴェルニカは歓迎もそこそこに、ケイナードがいるという執務室にむかつて全力疾走した。

そして奇跡的な速さでケイナードの執務室までたどり着き、そのままの勢いで扉を開け、現在に至る。

ケイナードの執務室に入ったラヴェルニカは、キョロキョロしていた。

「だつていないので。」

「あれ、ケイさまー。ケイさまどこですかー？」

せつかくケイナーードの執務室にたどり着き、感動の再会という場面なのに肝心の愛しのケイさまがいない。

「あれれ？」

ラヴェルニカは一旦外に出て表札を確認する。そこにはケイナードと忘れようもないスペルで書かれている。

「うん、間違つてない。」

中に入つてもう一度部屋を見渡す。

いるのは男が一人。赤い髪のルーズそうな男に、碧い髪と緑の瞳はケイさまと同じ色だけど、身長推定190?はあろうかというでかすぎて怖い男。

ラヴェルニカの天使の姿は何処にもない。

「あのー、あなたケイナーードさまが何処にいらっしゃるかご存知ですか？」

赤髪の男の方がにやにやとして嫌な感じなので、ちょっとと怖かつたがでかい男の方に聞く。放心したような顔でじつとこちらを見たから、ちゃんと答えてくれるか不安だつた。

「……。」

案の定、男は放心したまま何もしゃべらない。

「ぶはつ、ぶははははは！」

赤髪の男が何がツボに入つたかわからないが、爆笑しばじめた。いつたいこの一人はなんなのだろう。なんでケイさまの執務室にいるのだろう。

やがて追いついてきたマルニカとマイカも部屋に入つてくる。

「お母さまー！ケイさま何処にもいないの！執務室にいるつて言つたのに！」

感動の再会を逸したラヴェルニカは、眉を寄せて母親に抗議する。

「あら、いらっしゃるじゃない。失礼な態度をとつたらだめよ？」

マルニカは穏やかに微笑む。『ルベラント王国三大見ると危険な笑顔』に数えられるマルニカの笑顔だ。

「え、どこ？どこ？」

キヨロキヨロ部屋をもう一度見渡すが、やはりあの誰よりも可愛い男の子はない。

「ほり、こちら。」

マル二が手で指し示したのは、190? のでかい男だった。

chapter 5 : who is she 彼女は?

執務室の扉が開け放たれた。ケイナードの体は硬直する。そしてあの魔が部屋の中に入つて…。入つて…。こなつた…?

いや、違う入つてきた…。金色の髪に琥珀の瞳、その姿は忘れようもない。

だが、しかし…。

ケイナードは部屋に入つてきたトラウマの女を見て驚愕した。なんだ! このちつときは!?

その大きさは記憶にあるような、上から迫つてくる巨人のような女ではなかつた。平均的な女性の身長よりもかなり低いかもしれない。自分の胸元に額がくるかといふほど、小柄な女だつた。

「あれ? ケイさま。ケイさま何処ですか?」

そしてその小さな女はケイナードに気付く様子無く部屋の中をキヨロキヨロ見回している。自分は田の前にいるのに。

ケイナードは田を見開いて記憶と同じ姿で、なのに小さくなつた女を見つめた。

上から見下ろした魔の容姿は、とても可愛らしい姿をしていた。小さく小作りなパーツ。身長が低く、幼く見えがちだが体は女性としてきちんと完成されたラインを保つていて。白い肌にくりくりの目、鮮やかな金髪、そつまるで人形みたいだ。部屋中を見回すやや拳動不審な姿も小動物みたいで愛嬌があつた。

怖くて仕方なかつたあの女が、まるで愛らしい女性のように見えた。

そして気づく。

自分が大きくなつたのだ。あの頃より身長は比べ物にならないほど伸びた。倍近く伸びたと言つていい。

それがこれほどまでの印象の変化を生み出したのか…。

呆気にとられながらも様々な事実に気付いていつたケイナードに比べて、ラヴェルニカのほうはまったく何も気づいた様子がなかつた。

一旦部屋を出て戻つてくるという奇妙な動作を繰り返した後、あら「う」とかケイナードに向かつてこう聞いた。

「あのー、あなたケイナードさまが何処にいらつしやるかご存知ですか？」

後ろでルベラックが爆笑する声が聞こえる。

その言葉を聞いて何故か、ケイナードの胸にはいら立ちのようなものが生まれた。何故俺はすぐに気付いたのに、お前は未だに俺に気付かない。

それは恨みが籠つた感情にも見えるが、部屋に入ってきた当初の気付かれてたくない、逃げ出したいという思考からはまったく真逆だつた。

そして後ろからラヴェルニカの母君であるマルニカと、侍女が一人やつてくる。

ラヴェルニカは母親の方に向き直つた。自分を見ていた琥珀色の瞳が、向こうを向いてしまう。

「お母さまー、ケイさま何処にもいないのでー、執務室にいるつて言ったのにー！」

マルニカはちぢつとこちらの表情をみて薄く微笑むと、満面の笑顔に変わり娘に言つ。

「あら、こりつしやるじやない。失礼な態度をとつたらダメよ？」

「え、どこーどこー？」

ラヴェルニカの目はまつたぐ「ひむけむ」とはなない。胸がなぜかざわづく。

「ほら、じゅらじゅら。」

母親の手に従つて、やつと琥珀色の瞳がこちらに向き直つた。大きく輝く宝石みたいな瞳。

「は？」

そしてラヴェルニカは顔をしかめて首をかしげた。

chapter 6 : passage of time 時は流れる

ラヴェルニカはわけがわからなかつた。

ケイナードの執務室に着いたと思ったら、愛しのケイさまはいない。でかい男は何も答えてくれないし、赤い髪のやつは何故だか笑つている。

そしてやつと来た母さまがケイさまだと言つて指差したのは、あの190？はあるでかすぎて怖い男だった。

これは説教ものである。

「あのね。ケイさまはとつても小さくてかわいくて天使みたいなお方なのよ！確かに髪と瞳の色は同じで容姿も少し似ているけど、こんなでつかくてごつくて巨人みたいな人とは全然違うの！」

そう愛しのケイさまのことは今ではつきり思い描ける。さらさらの髪に、白いふっくらとした頬、綺麗な緑の瞳、華奢で纖細な優げな手足。あれ以上の美少年は地上にはおらず、天にもいるか怪しい。あれこそまさに私の天使。

「あの…。ラヴェルニカさま…。」

遠慮がちに声をかけてきたのはマイカだった。

「なに？」

「ラヴェルニカさまがケイナード殿下にお会いしたのはいつでしたつけ。」

それは馬鹿らしいくらい簡単な質問だった。自分がケイさまと会つた日を忘れるはずがない。

「5年前、正確には5年と127日と2時間前よ！」

「そ、そうですか…。」

自分の答えに何故か若干引き気味になる周りの人たち。「時間まで覚えてるのかよ。」と赤い髪の男がなぜかまた爆笑していた。

「それで？」

もういちいち氣にしてられないでのラヴェルニカはマイカの言葉を施す。

「その時ケイナード殿下は確か9歳でいらっしゃいましたよね。今はおいくつだと思います？」

「15歳と1ヶ月と12日。」

誕生日の暗記は基本だ。ラヴェルニカの頭脳は無意味に回転して正確な日をはじきだす。

「はい、たぶんその通りでござります。」

「それで？」

ラヴェルニカにはマイカが何を言いたいのか未だ理解できなかつた。

「15歳になれば成長されて別のお姿になつているのではないでしょ  
うか。成長期もとつぐに迎えてらつしゃるはずですし。」

「ロマーニ帝国の人は成長が早いっていふけど本当ねえ。あんなに小さかつた殿下もこんなに立派になられて。」

マイカの言葉を肯定するように母親が、でかい男に話しかける。ラヴェルニカの頭は嫌な予感で満たされた。

田はいつもよりいつそ大きく開かれ、でつかい男をまじまじと見つめる。

「も…もしかして、ケイさままでいらっしゃいますか？」

確かにちょっと似ているとは思つていたけど、髪の色も瞳の色もまったく一緒だけど。そんな、そんな…。

自分の身長のはるか上に頭があるその男は、何故か不機嫌そうな顔で答えた。

「いかにも。余がケイナードだ。」

ガラガラガラ

ラヴェルニカの中で、可愛いケイサモと結婚という夢が音を立て崩れた。

## chapter 7 : reverse 逆転

\*

ケイナードはラヴェルニカを見る。

自分をやつとケイナードだと認識したらしにラヴェルニカは、口を開いたまま固まってしまった。

肩をぽんっと叩かれて振り向くとルベラックがにやにや笑つていた。

「どうだ？ 実際会つてみて。」

「いや、なんというか…。」

胸には複雑な感情が渦巻いて言葉にできなかつた。

「ちなみにルヴェルニカさまは、『ルベラント三大美少女』でもぶつちぎりの人気らしいぜ。この三大美少女に選ばれるのはみんな15歳以下の女の子なんだが、ルヴェルニカさまだけは10歳のころから1-2年ずっと不動の一位らしい。良かつたな悪魔の女じやなくて、可愛い嫁さんで。ま、うまくやれよ。」

そう言つて側近は扉から去つて行つた。

ケイナードはあらためてルヴェルニカを見る。間抜けな顔をしても、色の良い小さな唇に、小作りの鼻、ふつくらした頬、その容貌は天使みたに可愛いしかつた。

\*

ラヴェルニカはケイナードを見る。

やつと田の前の人間をケイナードだと認識したが、頭の中は真つ白で理解できない。いや理解したくない。こんな現実。

肩をちょこんと触られて振り向くとにやにやと笑つて自分を見る母親がいた。

「それじゃあ、あとは一人で大丈夫ね。」

「へ？」

ラヴェルニカは母親が何をいつているのか理解できなかつた。

「あなたの了承で縁談は成立してゐるけど、結婚式までは日にはちがあるから今から一人つきりで親交を深めなさい。ちゃんと仲良くするのよ。」

そう言つて母親は上機嫌な笑顔で、去つて行つた。

「え、ちょっと待つて。」

ラヴェルニカは自失の状態ながらも嫌な予感に扉の方へ手を伸ばす。だが、木の扉は、無情にも閉じられていく。

ガチャツ

さらに扉の外側から不吉な音が響いた。

\*

ラヴェルニカはこちらを見ずに、母君が去つた扉のほうをずっと見てゐる。

何故だらう。あの琥珀の瞳が自分を見ていないと胸がざわつく。ケイナードは手を扉の方に向けたまま固まつてゐるラヴェルニカを見た。

昔と同じ部屋にふたりつきりの状況。5年前の記憶。自分より大きかつたこの女に好き勝手にされた恐ろしい思い出。

それと同じ状況なのに、今の気持ちは全然違つた。

5年間、悪魔だと思っていた女は、今、自分よりどうしようもなく小さい。

ケイナードはにやりと笑い、ラヴェルニカを後ろから抱き上げた。なんということだらう。自分の腕にすっぽりおさまるほどその体は小さい。その体は柔らかく自分の腕を受け止める。金糸の髪から覗く横顔は可愛らしく綺麗に整つてゐる。

ケイナードは笑いながら言つた。

「5年前のことを覚えているか？」

ラヴェルニカの体がびくつと震え、涙で濡れた琥珀の瞳がケイナードを見つめる。

「え、えつとお…。あれは愛ゆえにといつか…。あくまでも有り余つた愛情表現といつか…」

可愛くて、どうじょうもなく愛おしくなるのに、同時にいじめてしまいたくなるような表情。

ケイナードの胸に愉悦がこみ上げてきた。

\*

扉を呆然と見ていたラヴェルニカは、うしろからいきなりひょいと抱き上げられた。

背中に当たるかたい胸板。自分を強く拘束する太い男の腕の感触。自分を軽々と抱き上げ胸に収めてしまつ体の大きさ。

昔と同じ部屋にふたりつきりの状況。5年前の記憶。自分より小さかつたこの男を全力で可愛がった楽しい思い出が蘇る。なのに…、とてつもなく危険な感じがするのは何故だろ。この状況、この体格差。昔とは真逆なのと同時に、とてもよく似ていた。

5年前、天使だと思っていた男の子は、今、どうじょうもなくおきな男に成長していた。

ラヴェルニカは嫌な予感に、体を硬直させた。

なんてことだろ。自分の胸の中に軽く納まつた体は、今や自分をあつさり包み込み、その拘束から抜け出せる気がしない。

低く太い男の声が耳もとで響いた。

「5年前のこと覚えているか?」

覚えているとも。自分の人生の中で一番楽しかった記憶。でも、今逆の立場でこうされてみると、やられた側は決して楽しい思い出にはなつていなかつたような気がした。振り返つて見たケイさまの瞳は楽しげに揺れている。

思わず涙目になる。

「え、えつとお…。あれは愛ゆえにといつか…。あくまでも有り余

つた愛情表現といつか…。」

そう、あれは純粋な愛の証による行為。決して悪意はなかつたのだ。

「ふむ、それじゃあ俺も未来の妻に愛情表現するとしよう。」

そして墓穴を掘つた。

「お前がやつたようにな。」

ケイナードさまの顔に獰猛な笑みが浮かぶ。

そしてケイナードさまの舌がラヴェルニカの頬をぺろりとなでた。「ぎゃああああああああああ。ごめんなさああああああああい。」

### extra1 : the beast 野生化

そのあと放心してしまつたラヴェルニカとはやばやと結婚式をあげてしまつたケイナード。

新婚初夜、二人の寝室を訪れたケイナードが見たのは野生化したラヴェルニカだつた。

「ガルルルルルル！」

ベッドの上でこぢらを威嚇してくる小さな妻。

ヒヨイッ

なんといつても身長差があるのでつさり襟元を掴まれ捕獲される。

「ウウウウ！」

それでもしゃーっと可愛い瞳を精一杯吊り上げ睨みつけてくる。この姿を可愛いと思つてしまつあたりやられててしまつているのかもしれない。

「まったく、そこまで警戒しなくてもいいだろつ。」

「ずっと、ずっと抱きしめて、触りまくり、あまつさえ頬とかを舐めました！」

ラヴェルニカは涙目で言つ。

「お前だつて俺にやつたろう。しかも俺がもつと幼いときには。」

思わずじと目見ると、さすがにもう自覚したらしく。ラヴェル一  
力は気まずげな顔で横を向いて黙り込んだ。

### extra2 : devil whisper 悪魔のささやき

さすがに人間に戻ったが、未だこちらに対して警戒をとかないラ  
ヴェル一力。ケイナードは溜息をついた。こちらを警戒しているの  
に、ベッドの上から下りないのはちょっと間抜けだった。

「そんなに俺との結婚が嫌か？」

「いやです。だって大きくて怖くて可愛くないです。」

あまりにもきつぱり言われて腹を立てる気すら失せた。

「それじゃあ小さくて可愛かつたらいいのか？」

「もちろんです！」

それは無意味に力強い返事だった。

「はあ…。もう私のケイさまは何処にもいないんですね。」

ラヴェル一力は悲しげに溜息をつく。

「あの頃、お前のものだった記憶はないし、今も俺はここにいるだ。

」

さすがの言い草に青筋が立つ。

だがケイナードは深呼吸して落ち着きを取り戻すと、ラヴェル一  
力に語りかけた。

「そんなに昔の俺が好きか？」

「はい！ あれはまさに私の天使！ 世界最高の美少年！」

頬を紅潮させて満面の笑顔で答えるラヴェル一力。その瞳が見て  
いるのは昔の自分とわかつっていても嫉妬の心がうずく。

だが、あくまでも冷静に。ケイナードは獲物を狙う獣が如く呼吸  
を沈める。危険な気配は出さずに。

「それなら俺の子供はどうだ？」

「へ、ケイナードさまの子供？」

「そうだ、俺とお前の子なら、きっと昔の俺以上に可愛らしきぞ。」

危険な台詞だったが、ラヴェル一カの意識はそのまま自分とケイナードの子供を想像することに意識が行つた。少年愛好家の鏡とも言えるだろう。

世界で一番の美少年だったケイさま。そしてあまり自覚したことないが、可愛い子供が多いと評判の公爵家の子供。

碧い髪に琥珀の瞳、金色の髪に緑の瞳、ラヴェル一カの頭がフル回転して自分と昔のケイさまの特徴を持つ子供の姿を複数に渡つて想像しだす。そのどれもが完璧に可愛らしかった。

「い、いいかも…？」

そしてラヴェル一カが意識を取り戻した時には、ケイナードによつてベッドの上に押し倒された後だった。

「えつ、あれ？ ケイさま？」

何をされているか分からぬよつて慌てるラヴェル一カにケイナードは笑つて耳もとで告げた。

「どうか。お前が喜ぶようにたくさん作れ。」

「ちよつ。やめつ。きこやあああああああああああああああああああ」

あ。

(後書き)

これが自分がペ魯ペ魯される側になるかも知れないから、可愛い男の子や女の子がいてもペ魯ペ魯しちゃいけないよー新都おにいちやんとの約束だよー

英語は適当です。アホです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9676q/>

---

リバース！

2011年3月13日23時40分発行